

2. 沿革

文久2年（1862年）に加賀藩によって開設された彦三種痘所が金沢大学の創基とされているが、そのわずか5年後の慶応3年（1867年）、卯辰山養生所に「薬局」が設置され、薬剤部の起源となる。当時の薬局の責任者の氏名は明らかでなく、養生所が明治3年（1870年）金沢医学館、明治8年石川県立金沢病院と拡大・発展していく中、明治13年9月、記録に残る最初の薬局長として大井玄洞が発令されている。以後、現在に至るまでの薬局長・薬剤部長および薬局長不在時の代理まで氏名と業績が詳細に残されている（「歴代薬剤部長」参照）。

昭和37年（1962年）4月に薬局は薬剤部に改組され、初代薬剤部長には、山名月中薬学部教授・第16代薬局長が就任した。山名教授は、昭和54年1月には薬剤部長の教授職化により医学部附属病院教授・薬剤部長に配置換えとなった。薬剤部研究室としては、山名教授時代に、薬学部4年生1名、大学院薬学研究科修士1名を配属したことに始まっている。

昭和59年6月、市村藤雄教授・第17代薬剤部長が就任した。院内における薬剤師業務は拡大し、昭和61年に薬物血中濃度測定を開始、翌年には外来患者のための服薬説明窓口が開かれ、さらにその翌年には、薬剤師によるIVH調製が開始されている。昭和63年に、入院調剤技術基本料（いわゆる100点業務）が新設されており、平成3年（1991年）に脳神経外科から開始していた服薬指導業務が、11月には薬剤管理指導業務として承認された。病院情報システムが発展してきたのもこの頃であり、平成4年に外来処方、翌年には入院処方のオーダーリングシステムが稼働した。平成7年には注射薬にもオーダーリングシステムが導入され、全入院患者を対象に個人別セットを開始している。研究室は、平成3年に大学院薬学研究科製薬化学専攻（修士課程）に属した後、平成8年には本学大学院独立専攻として大学院医療薬学専攻臨床薬学講座となった。昭和61年4月に開始していた薬学部学生の病院薬剤部実習（2日間）が、平成8年には医療薬学専攻の病院実務実習（6ヶ月）の受け入れへと拡大、平成11年には、本学薬学部4年生全員の病院実務実習（2週間）の必修化に伴い、全員の受け入れが開始された。

平成11年7月、宮本謙一教授・第18代 薬剤部長が就任した。薬剤部職員36名でスタートしたこの年、精神科閉鎖病棟を除く全病棟に専任薬剤師を配置し、病棟配置医薬品の管理を開始した。新病棟に移行した平成13年10月には、薬剤管理指導業務が神経精神科病棟を除く全病棟に拡大した。チーム医療の推進とともに、病棟薬剤師への要望・評価の高まりを受け、平成20年には精神科病棟に薬剤師を配置した。平成22年にはICUに、平成24年には産科・産婦人科（GCU、NICUを含む）に薬剤師を配置し、この年の診療報酬改定にて新設された病棟薬剤業務実施加算の算定を7月から開始した。研究室は平成13年、医学部大学院の部局化に伴い、大学院医学系研究科循環医科学専攻医薬情報統御学分野と称することとなった。薬学教育6年制が開始される前年の平成17年には、医薬保健学総合研究科医科学専攻修士課程が設置された。平成20年、医学部附属病院は大学直属の施設となり、金

沢大学附属病院薬剤部と称することとなった。

平成26年5月、崔 吉道教授・第19代薬剤部長が就任した。人材育成を旨とし学位や各種専門認定薬剤師の取得を大いに奨励し、平成29年末現在、博士7名、博士課程大学院生5名、日本医療薬学会認定薬剤師9名をはじめ、がん専門薬剤師7名、抗菌化学療法認定薬剤師4名、NST専門療養士4名、小児薬物療法認定薬剤師2名、精神科専門薬剤師、認定CRC4名、実務実習指導薬剤師12名など延べ96件の認定等資格者を擁する総勢60名の薬剤部となった。更に、病棟薬剤業務と薬剤管理指導を充実させるための増員計画を立て直し2病棟3人体制に向けた歩みを急速に進めるとともに、平成28年6月10日の厚生省令改正に対応した未承認等医薬品の体系的な把握など医薬品安全管理体制を強化した。また、かねてから課題とされてきた後発医薬品の使用促進を加速させ、平成29年12月には数量ベース80%に到達した。研究室は、平成28年に医薬保健学総合研究科医学専攻循環医学領域臨床薬理動態学研究分野に改称し、医療現場で生じる様々な問題を解決し薬物療法の発展に寄与するため、薬剤部職員・研究室員が一丸となって研究に取り組む体制を構築した。薬剤師の活動領域が今後ますます広がることを見据え、平成29年には、「薬剤師の幅広い活動領域において高いレベルでバランスが取れて優れている薬剤師」のブランドとしてKanazawa University Pharmacist Standard (KUPS) の制定の取り組みを開始した。